



心萎えよ肉には眠りを

for adult.

・クエストを受ける

CONTENTS

03 「愛しき者の奥を射る物は」

04 「祝い踊るこの夜君のために」

05 「共に願う生還の叫び」

06 「樹海と魔物と術式についてⅠ」

07 「樹海と魔物と術式についてⅡ」

08 「名声の代償は栄誉か嫉妬か」

09 「氷姫が決る者たち」

10 「肉体の歪」

11 「呪い尽きる事もなく」

12 「さあ冒険を始めたまえ！」



「よいかマン子。我々はインベリアルクロスという陣形で戦う。全裸に幸運のネックレス一丁のマン子が先頭、防御力の高い私が後衛につく。お前のホジションが一番危険だ。覚悟して戦え」



「メディックの少女の尻に深々と銃が突き刺さった。薄いピンク色をした綺麗な穴が二杯に広がられる。メリメリと肛門括約筋の収縮を押し分けながら、本来は出てくるはずの場所に鋼鉄の銃身が埋め込まれていった。『なんだ、もうやたあああ!! 自分でっ……も、自分でやっ……ひんんっ、ひきゅっ!!』」

「冷たい固まりで身体の中を冷やされる感覚に、少女の身体がふるりと震えた。反射的に収縮した手指がシャツを力一杯握りしめてしまう。しかし冷えた感もほんの二杯のことで、熱体の知れない灼熱感に肛門が燃え上がる。『冷めてすよっ、こんなところで出来るわけないしやないですが、そもそも……その、お通しが悪いって相談してきたのはメディックさんの方じゃないですか』」

「といたなら、丸眼鏡をしたガンナーの少女はさらに銃を奥へとねじり込んでいく。『キチコッ! キチコッ! キチコッ!』」

「ひきゅっ!! たからいい、もっいいってばっ!!」
「こんな所にトラックハレット突かれたらっ、ああああ……! 私のおひり、濡れちゃうよっ!!」

「だがらダメですって、ハーティの回復役が体間が悪いなんて……あれ、どこかな? こっち……たったっけ?」
「少女が銃身を右へ左へと動かすたびに、直腸粘膜が強くかき擦られる。その度に腹部が突き破られそうな痺れと圧迫感が脳天まで突き抜け、上半身が天井を向くほどにけろりかえってしまう。だが、それは決して苦しみというふうな物ではなかった。むしろ内臓を突き上げられるような感に滑むのは粉れもない快感。硬く太い銃身が肛門を抉り、ピンク色の粘膜を力強く叩くたびに『おおああっ!! ひゅっ!!』」

「限界までしなった背筋にソクソクと妖しい感刺が走り抜けていく。銃口はちよと子宮口を裏側に到達していた。そこから押しつぶすようにガンガンと殴られ、追い出される。『下せ!!』」

「メディックの苦悶など知らぬ風独り合点したガンナーの少女は容赦なく引き金を引いた。銃身が大きく震え、白い液体がたつぷりと装填されたトラックハレットが尻の中で炸裂する。『はっ!!』」

「たよりに白く濁った愛液が閉じたままの秘唇からぼたぼたとしたり、シャツにシミを作った。『よし……こっわっ!! いきますよっ、しっかり耐えて下せ!!』」

「メディックの苦悶など知らぬ風独り合点したガンナーの少女は容赦なく引き金を引いた。銃身が大きく震え、白い液体がたつぷりと装填されたトラックハレットが尻の中で炸裂する。『はっ!!』」

「のうちにキュッと丸まり、肛門も反射的にきつくすぼまり、そしてまた揺るまりを断続的に繰り返す。また刺れ目にすぎない秘唇も同様で、何物にも触れられていないというのに淫らなしわからわっとなりと白く濁った本気の愛液が止めどもなくこぼれ落ちていく。『は……ひい……』」

「そうやって、何度か痙攣を繰り返した末にメディックの少女は力を失ったかのようにぐったりとベッドに突っ伏してしまった。そうなるからようやくガンナーの銃が肛門から抜かれる。異物に拡張された尻穴はすぐに閉まることもなく、ぽっかりと開いたまま奥から白い薬液と、黄ばんだ腸液をたらたらと垂れ流していた。『身体の方も抜けたし、これで明日のお通しは……ってあれっ!? メディックさん、メディックさん!』」

「ガンナーの少女は今になって自分がやりすぎたことに気づいたようであった。『は……ひい……』」

「ガンナーの少女は今になって自分がやりすぎたことに気づいたようであった。『は……ひい……』」



「んっ……んもっっ……んっ
……」

「ハートの小さな口のつばは
に、ソートマンのイチモツが飲
み込まれていく。また毛も生え
そろっていない様な少年の持ち
物であるにもかかわらず、その
長さよさは成人男性の物を優
に超えていた

「うぶぶ、これなら、猛き戦い
の舞曲」を歌わなくても大丈夫
そっだね」

悪戯っぽく笑った赤毛の少女
は、手を伸ばしてチロチロとか

り首の辺りをなめ回す。たっぶ
りと唾液を乗せた舌がっんっん
と敏感なところを刺激するたひ
に、少年の腰に甘い電流が走っ
て全身がびくびくと震える。へ

「二スは痛いほどに膨れあがり、
破裂してしまおうなほどだ。
一なめされることに大きくしゃ
くれ上がり、先端から切なげな
先走りの汁を溢れさせていた

「あっ……ダメ……たよ……
それ以上したら、ホク、ホク
……」

女の子と見まがうばかりの切

なげな表情をさせて、か細い喘ぎ声が漏れる。ハートの少女
を讀まないと二生懸命なのが可愛くて、そして愛おしい

「いいよ……そのまま出して、みんな受け止めてあげるから」
そして舌をよりいっそう激しく動かせる。裏筋を舌の表面に
杯にはわせ、時には刺き立ての皮の中に先端を突っ込んで限
界寸前の勃起を責め立てていった

「だ、ダメ……ホク、もう……あ、あああっ!!」
どくっ!! ひゆるるっ、ぶひゅうっ!!

少年の肉刺から大量の白濁液が迸り、ハートの顔面に降り
注いだ。はちゃはちゃと言っ首を立てるくらいに勢いよく、
そして粘度の高い液体が少女の上気した頬を叩く。その度に

赤毛の少女も「んっ!! んうっ!!」と切なげな声を上げ、



そくそくと背筋を震わせていた。股間からは甘酸っぱい汁が
滴り落ちて、ヘッドにシミを作っている。むせ返るようなオ
スの臭い、そして火傷しそうなほどの熱さに少女もまた絶頂
へと押し上げられていた

「はあっ……あ、は……」
「一杯、出たわ……でも、これで
終わりじゃ無いよね? 童族の行進曲歌って上げよ……あ
んっ!!」

「ほく……あ……」
「元氣だね、いいよ、あたしと寝ろ……」

ハートの言葉が終わる前に、ソートマンは少女をヘッドに
押し倒した。歌を歌うまでもなく、少年の肉刺はすでに堅さ
を取り戻している。

深夜の舞曲は、また始まったばかりだった
け止める。

「あはっ……はあ……あ……っ……あ……」

尋々しい色をした辛虫の産卵管がアルケミスト嬢の腹間を容赦なく抉り回す

つぼみよりは弾力性があり、太くもなかったが、逆に「平均サイズよりちよつと上」のそれは嬢の開発された子宮と腹とはとても良くなじんだ

敏感な粘膜をトケてかきむしられるたびに甘美な痛みが脳を焼き、先端が子宮口をゴコンゴコンと強く突きたひに

「……きひい……い……っ……お……お……」

腰骨を貫く甘い衝撃に下半身が痺れる

危険なつぼみから逃れられたのは幸運だったのだらうか、ハーティをあっさり皆殺しにされるほどではない

いない彼女にとっては、そう思えたかも知れないだがそれはさらなる不運と淫迷宮への入り口にすぎなかった

股間から愛液を垂らしながら逃げ延びた彼女は近くでわき出る樹液を見つけた、わらをもすがる思いで近づいたのだが……

結果はこの様だ、どこからともなく現れた「毒牙の辛虫」相手に、ほとんど瀕死の彼女がどうこうできるはずもなかった

毒牙の辛虫たちは、アルケミストの嬢を苗床に選んだようだった、子宮の奥まで深々と刺さった産卵管の

先からは耐えることなく熱いマグマのような白濁液を注ぎ込み、生殖行為を繰り返していた、もう子宮がほち切れんばかりに注ぎ込まれ、ほっそりとしていたお腹はほこりと飛び出しているほどだ

「はあ……あ……あ……やぶ……れ……る……っ……おらがが……やぶれええ……」

ひゆるっ、ひゆるっ！と勢いよく白濁液が発射されるたびに強烈な水流が奥を叩く、それだけでも絶頂物たというのは、さらに攪拌された水流が子宮内壁のもっとも敏感な部分をもみ洗いしてやるのだ

激流のような汁は子宮頸部のPスホットをしたたかに刺激する、人の手でもへニスでも、そして触手でも到底不可能なところをしたたかに刺激されてしまう

「か……あ……っ……っ……！！　ああああああああ……」

狭い空間で渦を巻くように動く白濁液の流れは子宮を揉みしぼっているかのような強烈な悦楽をわきおこし、もっと大きな渦となって錬金術の使い手を飲み込んでいく

目の前で多彩な色に彩られた超核熱の術式が何層も何層も炸裂した、嬢の口がハクハクと腫れ上がった魚のよう

に開閉を繰り返す、グローブに包まれた指が痙攣するかのよう

に細かく震える、三匹分の辛虫の精液に

まみれた全身は真っ白に濡れをほり、救いを求めるように開閉する指先からほたほたと虫汁が滴り落ちた

もはや腹と子宮が境界に達したと悟った辛虫は、さらに尻穴にも注入を始める、前を犯す産卵管に負けず劣らずの異物は、薄皮一枚隔てて敏感な直腸粘膜と腹を裏側からすりつぶしながら、一枚一枚にすり込む

ように丹念に白濁汁をふちまけていった

「ああああああ……っ……っ……！！　おっ……っ……っ……お……！！」

本来ならば排泄する器官に挿入され、あまつさえもその中に注入を受けているというのに、そのおぞましい感覚でさえも今のアルケミストにとっては極上の快感にしか思えない

二本の管が狭い穴の中でタイミングを計ったかのよう

に律動するたびに、前の穴からは白濁汁の混じった愛液を、後ろの穴からは黄色ぼんだ腸液を垂れ流して、浅ましくいきまわってしまふのだ

絶頂の連続に徐々に痺れていく思考力、濁りきった思考の中で、錬金術師の嬢はふと思った

「ああ……こいひゅら……わらひと……いっひゅらっ……んら……」

世界樹の迷宮に住まう魔物は女の肉を淫らな苗床に変貌させてしまう錬金術師達だったのだ、と

「んああああっ……」

薄暗い倉庫の中に、ガンナー少女の嬌声が響き渡った。太い銃身が股間に突き刺さり、銃口がぐりぐりと子宮口を押し揉んでくる。無骨な鉄のかたまりは少女の未発達な膣粘膜を容赦なく抉り、鈍い痛みを送り込んだ。自己防衛的に愛液はわき出し始めてはいる物の、それで苦痛が和らぐわけでもないし、人ではなく異物による処女喪失の悔しさが粉れるわけでもない。

「つく…… あたしにこんな事して、どうしようっ……このよ……！ これであんたらが強くなれるわけじゃないでしょ……」

彼女が所属するハーティは破竹の勢いで迷宮を踏破し、その名声は一気に高まった。だが、急激な成功は嫉妬を呼ぶものである。

理不尽な妬みをぶつけるかのように、男は無言で突き立てた銃を前後に動かした。乱暴にではなく、銃身

の太さになじみ始めた膣をなだめるようにゆっくり、そして少しずつ、見た目の無骨さからはとても想像も出来ないような繊細な動きだ。

「んっ……うっ……」
吊られた身体がふるっと震えた。ひりひりと引き裂くような痛みしか伝えてこなかった粘膜を擦られる感じが、一転して甘い痺れのような物を送り始めた。こつんこつんとリズムカルに叩かれる子宮が甘美な疼きを発し、全身の体温が上がっていく。体中にほの香る汗が沸々とわき立ち、薄暗い倉庫の中に淫靡な香りが充満し始めた。

ガンナーの少女に性感が産まれ始めたことを悟った男は、銃の動きを変えた。大きなストロークで銃を引き抜き、クリトリスの腹を擦りながら、一気に奥まで貫き通す。くじゅんっ!! という濡れ音と共に銃口が子宮口に叩き付けられた。

「ひびく……」

その瞬間膣の奥から快感の大波がわき起こった。波は一気に全身を覆い尽くして脳天を直撃し、少女の脳裏を白く押し流しかける。スリッパな身体がひときり大きくなるのけぞり返り、背も折れよとばかりにじなつた。

銃身と秘唇のわずかな間から、水鉄砲のように勢いよく愛液がびゅるっと飛び出してくる。

「ひゃんんんっっ!! ……う……なに……なに……撃ったの……あたしの中で……」

まともな性交の経験も自慰の経験もない少女にとっては、絶頂の衝撃は銃の発砲に勘違いするほどのショックだったのだ。

だが、ガンナーの少女を撃ち抜く快楽の弾丸はまだかすった程度。これからが本番であった。

「いやあああつ……もうそれ以上、ないから……」

スキューレーの魚介類にも似た足がドクトルマグスの秘部を

深々と貫いた、無数の吸盤はそれ自体がイボのような役目を果

たし、少女の腹内をゴリゴリと抉り倒す。敏感粘膜がかた柔ら

かい不思議な感触でかきこすられる度に、トレッドマークの帽

子がすり落ちそうなほどに顔をのけぞらせた。それだけでも息

も絶え絶えだというのに、もつとも敏感なクリトリスや乳首に

すら吸盤触手は絡みついていく。感度を増したその場所がキユ

ウッと吸い付かれ、好き放題吸い上げられてから

「ひんんんんっ!!」

キュボンッと勢よく離される。それが無数の吸盤で幾度と

無く繰り返されるのだ。濃厚なキス責めを無限に食らっている

かのような過酷な責めは、ドクトルマグスの少女の敏感肉豆を

さんさんに打ちのめした。吸われ、引つ張られ、離されるのワ

ンセットごとに愛液が、時には潮もしぶき、凍り付いた地面に

湯気を立てて滴り落ちていった。

もし彼女がドクトルマグスでなければとくにいきすぎで絶

命していたら。だが、皮肉なことに彼女がハーティ全員に施

した「巫術・皮硬化」と「精霊の守り」が苦痛を……いや、快

楽を長引かせる結果となった。死にたくても死ねないのだ。強

化された肉体は腹がふくれるほどの触手にもかううして耐え、

守りは度重なる絶頂で消耗した体力を少量とはいえ回復させ続

けている。

吸盤でクリトリスを吸われながら、さらに腹内からクリの根

本を吸われながら擦られると、股間から爆発的な快感がわき起

こる。その上GスポットやPスポットを同時に吸い立てられて

一気にスっつと強く突き立てられてはたまらなかった。どん

な女でも耐えることなど出来るわけのない圧倒的な悦びの奔

流が全身を支配する。全身

がどうしようもなく震え上が

り、心臓が止まりそうなほど

の絶頂感に身を震わせて叫ぶ

ことしかできなかった

「くあああああああああ

あつっつっつ!!」

「おあああつっつうあああ

あつっつ!!」

「喘ぎ声というより、痛切な

叫び声が偶然重なった。随喜

の涙がかすむ腫れ声のした方

を昇上げてみれば、ハーティ

ンの少女もまた太いたこ足の

ような触手に深々と貫かれ、

悶絶を繰り返していた。股間

から滝のように愛液を垂れ流

し、もつほどん意識もない

のか時折叫びながらびくびく

と震えているだけだ。鉄盤を

跨った鐘は脱がされずに、股

間部分のみはぎ取られて犯さ

れているのが哀れた

他のハーティの姿は見えな

いが、時折喘ぎ声やらうめき

声は聞こえてきている。だが、

それもたんだん弱くなってい

ているようだ。彼女がかけた

巫術の硬化時間が限界に来て

いるのだ。そうならば、皆々

ダでは済まないだろう。

ああ……ごめんさい……

アーティンデ……同業のよし

みて何とかしてあげたかった

のに……)

その思いを最後に、彼女の

思考はとぎれた。

「きひいっ……!! (あく……) ……
あ……おっ……!!」

ヌルヌルと乳房を、そしてクリトリスを圧迫されるたびに息が詰まり、頭を殴られるような強い快感で脳みそが混乱する。縛り上げられた全身が病的なまでにガクガクと震え、あっという間にほころんだ秘密から全身の体液が流れ出してしまっただけではないかと言っただけに蜜があふれ出して

その蜜に誘われた毒樹のツタが、ピンク色の花弁へと差し込まれていく。それだけで何度絶頂しても、その果てに失神してももって大きな絶頂に意識を呼び起こされる。ダークハンターは「エクスターシー」をイヤというほど味あわされていた。

「くあ!? あっ……ちきしょう、この正変態
……野郎が……!!」

それでも抵抗を続けていたダークハンターだったが、それも長続きはしなかった。ギチギチと締め上げられる全身が急に熱く火照り始めたのである。肌にツタが食い込む感触は痛みではなく、心地よい痛痒感となって伝わってくる。敏感になり始めた皮膚の上でツタが蠢き、擦過されるとひりひりとした快感が身体の奥へ染みこんでくるようだった。事実、ツタの表面にまでもあり、それが吸収されていたのだ。

「うそ……うそ……こんなの……ふあ……あ、ああ、ああああ……!!」
身体の昂ぶりはとどまるところを知らない。もうこれ以上ないくらいに絞り出されていた乳房がさらに満々と張りつめ、先端の乳首も破裂せんばかりに勃起してしまう。森を駆け抜ける

「うっっ!! ……え……あ……む……いっ!!」

「おあ……あ……あ……んぎっ!!」
ダークハンターは白目と泡を割いてのけぞった。快感神経の束をちぎれそうなほどに締め上げられると、痛いほどの快感が下腹部で炸裂して脳天に突き刺さる。強く絞り上げられたクリだから、毒樹の吸収も早かった。あっという間に女殺しの毒がもともと敏感な部分を冒していく。





もうまともに言葉を発することも出来ないようだった。神秘的な雰囲気と混ざった黒装束は真っ白な粘液に濡れまみれ、無様な斑点をいくつも作っていた。華奢な肉体が時折ひくひくと震え、なたらかな乳房がすかに上下することだけがカースメーカーの少女が生きていることをかろうじて証明している。

「……あ……は……あ……あ……ん……お……」
それでもその表情は至福そのものであった。それもそうである。普通の人間、いや魔物とでも味わえなような極上で、A魂まで吹き飛ばすような濃厚な快楽を与え続けられたのだ。脳内は極彩色のもやが立ちこめ、濁った瞳にはもう男達の姿も見えていない。

カースメーカーはその職業上慣れを隠し買いやすい。それは彼女も例外ではなかった。呪いを受けた者の依頼を受けたカースメーカーの男達が、少女に復讐

を果たしに来たのである。

男達が少女の硬く閉まった秘密を突き始めた頃には、まだ無反応だった。だが一度絶頂を迎えた時にスキルの本領が発揮される。男達が果てれば果てるほど、快感が倍増していくのである。

「……あ……あ……あ……ん……お……」
男達が二度果て始めた辺りから、カースメーカーの少女の様子が変わる。まるでお面のようは無表情だった顔に赤みが差し、股間を突かれる度に全身が跳ね上がる。ドロドロとこぼれ出す愛液は白く粘ってきつく匂い少女の物とは思えぬほどの濃厚さを示していた。

「あ……ああ……あ……ん……」
無口ながらも全身が荒れ狂う性感に翻弄されているのが良く分かった。乳首は乳輪まで膨らむほどに勃起し、クリトリスもまた同様で最奥を突かれる度にうれ

しげにひくひくと痙攣しているのだ。

カースメーカーの男達が用いるペインドレートで、2倍の快楽と、そして自分自身の肉体が産む悦楽が混ぜ合わさっているのである。普通の人間に耐えきれぬような物ではなかった。頭の中で桃色の稲妻が何度か何度もひらめき続け、止むことがない。全身はドロ

ドロに甘く煮解けて、呼吸をするのが精一杯という有り様。下半身は度重なる絶頂地獄で感覚が一切無くなり、愛液と同化して流れていってしまったのではないかとと思うほどだった。しかし、それでも男達の復讐はまだ終わらない。わずかな休憩を挟んで陸辱はまだまた続くのだ。

「あ……あ……ん……あ……ん……」
少女の二穴が再び力強く突かれ始める。人を呪わば



「あついのだけ……」

「リーダー。リーダー聞こえますか。聞いてますか」

「なんなのだけ……あつくてそれどころじゃないのだけ……」

「まあ確かに暑いですが……だからってその格好はなんでですか」

「なにって……『呪印の兵装・軽量化バージョン』なのだけ」

「いやいや、ただの紐ビキニじゃないですか！」

「なんとこの布地面積で元の呪印の兵装と同じだけの防御力を誇るすれものなんでですよ！（byショップ商店）ですってよ？」

「まあ紐ビキニだろうと全身を覆うケープだろうと素晴らしきこの世界ではたいして変わらないのだけ。それなら涼しいほうがいいのだけ」

「ちよっ、あつはい振り回すのやめてください！ 男どもの目の毒です！」

「あはは。ハイ・ラガードにはなんで回復の泉がないのか理解し方ねるのだけ。ほら無駄口叩いてるヒマがあるなら泉でバシタさんやクマさんたちと戯れているだけで高収入が得られるクエストを探してくればいいのだけ。これで万事解決なのだけ。」

「さあさあほらほら、さっさと行く方がいいのだけこの木端役人」

「むがっ、ちよっ、胸を押し付け……癖……れ……は……は……だ、誰が木端役人ですか！」

「だいたいそんなに臆屈に閉じ込めてるから成長しないのだけ。仕方ないこのリーダーが揉んでさしあげますもみもみ」

「んやっ……、だ、だれも頼んでなんか……あ……あ……」

「んやっ……、だ、だれも頼んでなんか……あ……あ……」

このギルドがハイ・ラガードの迷宮を制するのはもうかなりしばらくくえらい長い間先のお話。

金の珍魚亭

ときどきSQ対談

(ざくろ)： 2から入ったから師匠とかメディ子のどこに人気があんだか理解不能だったなあ。ケミ子はまあ高橋せんせ好きそうだなと思っただけど

(高橋某)： たまらんぜあのお堅そうな感じ！

(高橋某)： あの目で粗チンをなじりたい

(ざくろ)： びりばせんせは誰が好きなんですか

(びりば)： んー、最初はパラ子さんから入ったんですが。

(高橋某)： セイバーですね、わかります。

(ざくろ)： ああ すげえわかりやすい

(びりば)： セイバーっていうなーwww

(びりば)： いや、まあそうなんですけど！w

(びりば)： でも、やっぱりS02ではガン子さんにやられたんですがね。ざくろセンセの嫁は誰ですか？

(ざくろ)： 金髪ドク子かおさげカスメかで超絶悩んでるのですが…。うーん金髪ドク子かな。ロリババアなのにアホの子くさいのがたまりません！うざぎ！

(びりば)： おさげカスメのほうが上だと思ってましたが、そういう理由で嫁に決定したのかw まあ、見事にアホの子オーラ漂ってますからなあ。

(高橋某)： うちのPT構成は前衛ペ ブシ子 後衛ガン子 メディ子 いいんちよ

(びりば)： うちのは、前衛ペ レン男 パー子 後衛メディ子 ケミ子 ですね。

(ざくろ)： ベット使い多いなっていうか結構かぶってるのね。高橋せんせのPTは死人が良く出そうだね

(高橋某)： 比較的やこいPTなのはいなめめ

(ざくろ)： 漏れは前衛ブシダドク 後衛カスパドでしたね。超攻撃型PT

(ざくろ)： 最初の頃はカスメじゃなくてアルケミ入れて超核熱撃ってたけど。師匠は1層でクビにした

(びりば)： うちもケミ子使いまくってますが、ケミ子さんは強いが燃費に問題があるのが難点；

(高橋某)： あっという間にTP切れした。だが、それがいい（コリ

(ざくろ)： ガス欠する設定は結構好きだ。

(ざくろ)： 「切り札は先に見せるな。見せるなら、さらに奥の手を持って」

(びりば)： 逆にあの超火力で燃費が良すぎると興奮するのは間違いないしなー。

(ざくろ)： アルケミ武器何装備しても変わらんのがもったいなかったな。ゴッドフィンガーないのかよゴッドフィンガー

(高橋某)： 主にHPやTPをブーストするのが役割でしたなあ

(びりば)： 酷い時はTPブーストばかりつけて、一撃喰らったら即死って状態でうるついでたこともしばしば

(ざくろ)： というわけでまた対談のお時間がやってまいりました。カラー本で対談なんてどんだけブルジョワな紙面の使い方なんだよとお嘆きの貴方。嘆いてるのは俺だ。ざくろです

(高橋某)： ギルド「ばれっと」の中の人。自分のパーティメンバーに自分の同人作品で作ったキャラの名前を付けてしまう痛い人。だがキツキツな妄想をしていない辺りはまだ一線を踏み越えていないようである。高橋です

(びりば)： ギルド名は「アヴァロン」。キャラ名もどこからツッコんで良いものか迷うくらいの月型厨だったりする人； でも、お気に入りのはずのパラ子（セ〇バー）は何故か万年倉庫行きだったりする。……だって、ベットのほうが皆を良く守ってくれるんだもん（=ω=） びりばです

(ざくろ)： 対談としては各自のギルド名を名乗りつつ自己紹介するのが良いような気がするので早速羞恥プレイをしています。おまえらオリジナルの恥ずかしいギルド名つけるよ。ちなみに僕は「エルカーエス」、はいプレイ当時どハマりしてた同人ゲームからですがさっぱりわからないですね。

(高橋某)： しかし小生の記憶ではざくろ先生は唐突にS02やり始めたような気がします。ざくろです。

(ざくろ)： なんてだろう ガン子が気になったのかな。1のときはDS持ってなかったのですよ。あとはmixiで異常なwiz好きの人がハマってたりしたからかな。1のデザイン今見るともっさいような気もするけど2のキャラはぶっとんでるのが多くて目を惹いたのは確かだ。ひむかいのろりせんせいすげえ

(高橋某)： おいどんはファーストインブレスジョンでは大正ロマンブシ子だったので

(びりば)： おいらは、イベントの時に連れが持ってきてやってるのがすげえ目についたので。

(高橋某)： 結局の所 Wiz もシレンも S0 も似たような物で、繰り返しをどれだけ愉しませるかにつぎるゲームですからねえ

(高橋某)： 私の中での評価は「とても楽しい作業ゲー」

(高橋某)： ……それが世界樹の迷宮なのです！

(ざくろ)： 止まらないけどやり尽くすと途端に触らなくなるゲームだよ

(高橋某)： ……それが世界樹の迷宮なのです！

(ざくろ)： もうメのお時間？

(ざくろ)： メガテンやったことないんで新鮮でしたよ 3Dダンジョンなんてゴエモン2以来だ

(高橋某)： それ巻き戻りすぎ

(高橋某)： あたしは CD-ROM 2 版 Wiz 以来かな

(ざくろ)： ゴエモン2 か月風魔伝かどっちかだ

(びりば)： おいらも W I Z を軽くやったくらいで、それ以外はちょっと思い出せないなあ。

(高橋某)： ゴエモンにしても Wiz にしてもガキの頃はおもしろさがようわからなかったな

(ざくろ)： ゴエモンの 3Dダンジョン面で迷って酔って吐いて嫌になって投げてから触らなくなった

(高橋某)： あああ

(高橋某)： わかりすぎて思い出しグロしそう

(高橋某)： ポートピア連続殺人事件のこうぞうのだしきでグロ吐いたのが 3D はつだった

(ざくろ)： おガキ様には空間把握能力が備わってないんですよ。永遠に同じところグルグル…

(高橋某)： 今のおガキ様って S0 やってたのしいと思うんだらうか？

(ざくろ)： 漏れは靴音に感動したけどなあ…

(ざくろ)： R0 のスキルツリーシステムは楽しいと思うんだけど

(高橋某)： 3Dゲーは大人のたしなみということでムズイというか特に目的もなくダンジョンをうろろろする意味が分からないのではないかと

(ざくろ)： そんなもんですかね。ドラクエ好きな奴ならレベル上げという単純作業自体が楽しいと思うんだけど

(びりば)： キャラのカスタマイズできる分、ドラクエよりレベル上げるのも楽しいと思うし。

(ざくろ)： ゲーム外の時間でも妄想できるゲームはいいゲームだよ。TCG でどうデッキ組むかみたいはどうスキル取ってか考えるのが楽しい

(ざくろ)： そういうの繰り返しするとキャラに愛着沸くんだよなー。台詞もなににもないのに。

(高橋某)： 妄想といえば、ギャップもいいわけ

(高橋某)： 実に萌え絵でハーレムパーティでもやってることはすげえバイオレンスな感じがまた

(ざくろ)： 初めての全滅は当然のようにシカでした。後半はあんまり全滅しなかったが HG 持ちのバード年中入れてたからレベル高かったせいかしら？

(高橋某)： ハードゲイ持ちですね、わかります

(ざくろ)： ハードロリカ (ちから) ！

(ざくろ)： ロリカハマタ \ (^ o ^) /

……おあとがよろしいようで。



(高橋某)： まあ魔法の少女が杖が一本有ればあとはどうとでも

(ざくろ)： 間違っていないんだけど最近の魔法少女は武闘派が多いな…。便利な世の中だわ

(高橋某)： アルケミさんも (いいんちよでなくても) 絵面だけ見るとかなり武闘派なのよね

(びりば)： いつの間にかそれが当たり前になってますのう。

(高橋某)： あの錬金術発動機がなんとも。

(びりば)： 魔法少女というより、むしろハorenと言うべき風貌ですからの：

(ざくろ)： ハガレンが出るか G ガンが出るかカルドセプトが出るかで世代がわかります

(ざくろ)： ガン子は前評判高かったけどゲームやたらうなぎ下がりだったなー。

(びりば)： おいらも買ったときには「こいつ絶対使う！」と思ったのに、いつの間にか倉庫行きになってた罨が：

(ざくろ)： 器用貧乏なのがいけない

(高橋某)： ドラッグパレット美味しいです

(ざくろ)： 取ったけど使った試しがないわ

(びりば)： 回復役がドク子メインの時期には多少使ってたー

(高橋某)： 回復役のドク男です (^A^)

(高橋某)： ドクオッ！ドクオッ！

(ざくろ)： あれメディ子使ってたんじゃないの？

(高橋某)： 実はそう。封建的なパーティ構成でして

(ざくろ)： ドク子派は漏れだけカー。ひとりじめしちゃうよちゅっちゅっ

(高橋某)： そう、聞いてみたいことはあるのですよ

(高橋某)： 正直なところ S0 は面白かったですか、いわゆる懐古ゲーですが。

(ざくろ)： 凶鑑コンプするまでやりましたガ

(ざくろ)： 世界樹の面白さはネバーゲーみたいな感じだと思ったな。スネオとかイクサとかアスカとか。

(ざくろ)： もしくは俺屍

(ざくろ)： なんとというかマップ書き残しがあると寝るに眠れずまた潜ってしまうとか

(高橋某)： 中毒性高いね

(びりば)： 俺屍なつかしいーw うち全階層制覇くらいはなんとか出来ましたガ。





■あぶりだしざくろ（表紙、裏表紙、02～07、08塗り、10塗り、11～15） / ドウガネフィフイ

どもですざくろです。
今回はセカキューのカラー本ということでめたんに楽しく作業できた気がします。高橋せんせ、びりばせんせ
ご協力どうもありがとうございました。いやー1週間でカラー 10枚近く塗れるもんだなー。でも世界樹じゃ
なかったら到底モチベーション（※もちでオナニーすること）持たなかったと思うわ。はわわドク子結婚してくれ！

is- savant

■ <http://zaku6.sakura.ne.jp/>

■高橋良喜（SS） / Palette Enterprise

長編というのも難しい物ですが、こういう超短編を九本ひねり出すというのも
また難しい物です。彼女達の冒険が皆様の夜の冒険のお供になることを祈りつつ、
またどこかの迷宮でお会いしましょう！

Palette Enterprise

■ <http://www.palette-e.com/>

■ B-RIVER（08線画、09、10線画） / H・B

えー、今回一番働いてなかったりします： お二人共、どうもすみませんした…orz
でも、エロエロフルカラー本は今回初参加なので楽しかったですよw
世界樹3が出ることを願いつつ、忙しい最中に出ないことを祈る今日この頃です。

Palette Enterprise

■ <http://www.palette-e.com/>

◆心萎えよ肉には眠りを（汝が持てる全ての抗う力、働くこと能わず）

2008.08.17 / C74

2008.09. / 2版

発行：ドウガネフィフイ

著者：あぶりだしざくろ 18

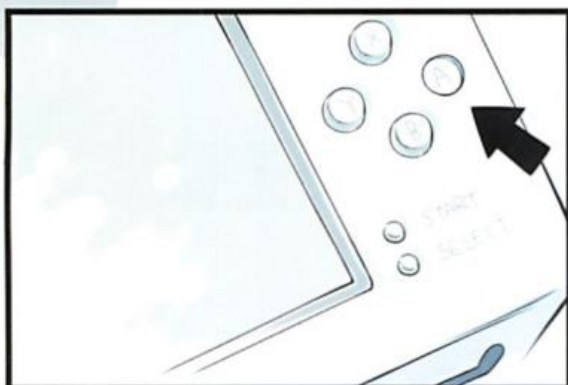
<http://zaku6.sakura.ne.jp>

zaku6@jcom.home.ne.jp

禁無断転載・複製・複写

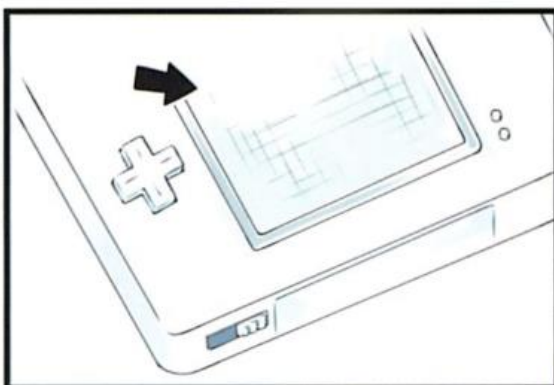
印刷：PICO

世界樹の傷跡 2



Aボタンが潰れている……

世界樹の傷跡



マッピングのせいで
基盤の目状に傷がああああ
あああ

お"1年も使っていない"こせ"るよ…

2008
10月16日
セカキューホ